

「今……………」

——物思う春の殿守、叱られる（『今物語』より）——

松 本 寧 至

一

笑いはもっとも人間的なもので、人がさまざまであるように、笑いもさまざまに人間的であるから、哲学の命題にもなるし、文学の題材にもなる。

身分のある人が、身分のない人のように振舞うのを余裕をもってみると、まことにおかしい。また偉い人がある種の動物に似ていたり、ある動物のしぐさが、ある地位のある人の物腰に似ていたりすると、その動物と同格になったようでおかしい。

『今物語』には、軽妙な説話が多い。笑話というべきものも多い。どぎつい風刺というのではなく、軽い笑いである。失敗を痛烈に笑殺するのではなく、おやおやそこまで野暮だったの、という親しみをもった笑いである。

作者は藤原信実といわれ、信実は歌人としても知られるが、似せ絵画家として著聞している。いわゆる肖像画家である。

もっとも、会ったこともない、柿本人麿とか斎宮女御なども画いている。絶世の美女小町の場合は後姿を画いて鑑賞者の想像にゆだねているといった手法などは、肖像画家の技巧の極致かも知れない。

当時の人物の似せ絵も多く画いている。『中殿御会絵巻』（但し、現存本は摸本）もあり、後鳥羽院が隠岐へ遷幸されるとき、信実がその宸影を画き奉ったことなどもある。

絵は空間的なもので、その映像を一瞬のなかにとらえることである。しみじみと時間的に述べるより、ぱっと写すということになる。

ぱっと一瞬を映すということが、人生の深みとか悲しみを、あるいは喜びをとらえないというのではない。もちろんそこに、心搏たれるものはある。あるけれども、説明的ではない。その時の動きや、心を写しとることである。記念写真的である。だからその時の歴史である。

瞬間的に変るものは、「あはれ」であるより「をかし」である。

春はあけぼの、やうやう白くなり行く山際すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。

というように刻々と変化して行く趣きは「をかし」でとらえられる。『枕草子』の基調は「をかし」である。隠岐遷幸直前の後鳥羽上皇もその意味では、「をかし」である。この『枕草子』をもっと平板にしてユーモラスにしたのが、中世の『弁内侍日記』であり、この女房は、おもしろ、おかしく宮廷生活を書いている。それも歌をまじえた短章である。

この弁内侍こそは、信実の娘である。であるから信実父子は、どちらかといえば軽妙洒脱に、あまり物事に深入りせず、生涯を送ったようである。深入りしないというのは見ていなかったというのではない。冷静に観察していた結果である。けっしてなんの波乱もなく、屈託ない人生を送ったというのではない。が、人生をそのように観じて過ごしたのである。悩みもあれば、苦しみもあり、望みもあったに違いないが、そうした人の世を写す芸術家として見るように、信実

の画家としての一面が、『今物語』という形で表現されたものではなかったか。

『今物語』という説話集もそう力^{りき}んだものではない。見聞したことをさりと書いて、ああそうか、と思わせるなにかである。

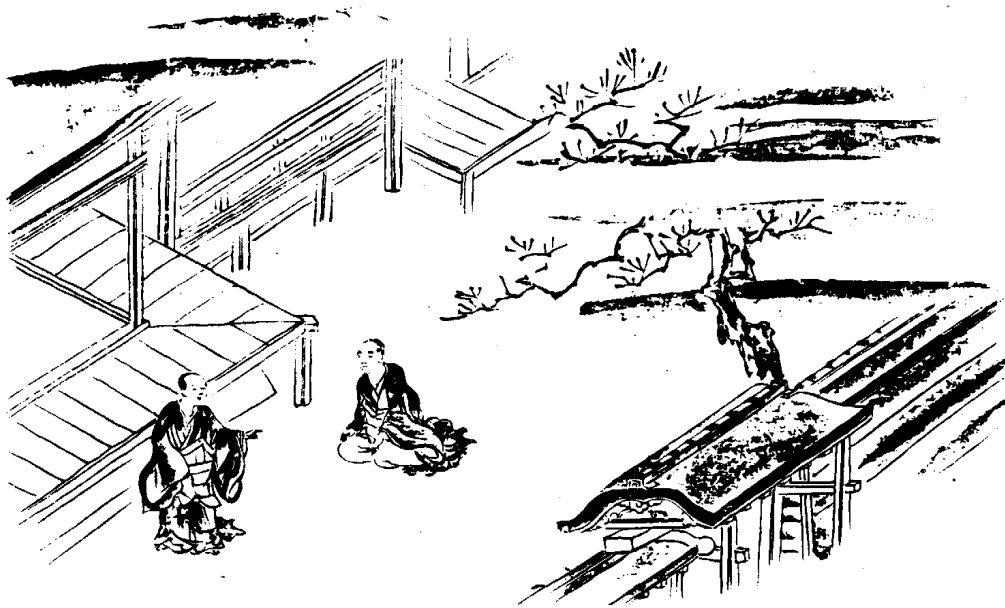
二

第四十五話もそうした説話の一つである。風流を解する従儀師と、硬い一方で、それがいったい何のためか、その意義すら忘れてしまうほど緊張しきっている執行とのやりとりである。その場面を想像すると読者も微笑がこみあげてくる。

時の権力者、鳥羽上皇が突然御幸される。花見のためである。花は散っていた。御幸とあれば、清掃しなければならぬ。法勝寺の執行は、とにかく、御幸とあれば失礼のないように清掃しなければならぬ、ということだけで頭が一杯だ。手配を命じられた従儀師は、落花の風情もなかなかで、これをお目につけたらどうだろう、というゆとりがある。なんでも掃き清めればよいものではない。むしろ、落花をお目につけるべきだとする。この考えの相違からおかしさが生じる。緊張し切って花見の意味すら見失った執行と、余裕のある従儀師との対照。余裕をとりもどすどころか、あらぬ言葉まで吐いて叱りつける。なんてこった、ということになる。

本文はこうである。

鳥羽院の御時、花のさかりに、法勝寺へ御幸ならむとしけるに、執行なりける人、みてとくまありけるに、庭のうへに、所もなく花ちりしきたりけるを、「あなさましき事也。たゞ今御幸のならむずるに、いままで庭をはかせざりける」としかりはらたちて、公文の従儀師をめして、「いままでいかにさうちをばせざりけるぞ。ふしぎなり」といひけ



——今物語絵巻より——

れば、ついひざまづきて、

ちるもうし散しく庭もはかまうし花に物おもふ春のこ〔諸本・

と〕のもり

と申して、「こや、御房がはき侍らぬに」などいひければ、「はゝかつ
ひ」といひて、猶しかりける。⁽¹⁾

歌の意は、花が散るのも惜しい、せつかくの御でましですからお掃除も
とは思いますが、庭一面に散り敷いた花びらを掃いてしまうのも惜しく、
花のために、どっちにしようか物思いをしているのですよ、この風流な春
の守衛さんのわたくしは。この歌には、

殿守のとももの宮つこ心あらば此春計朝清めすな^{ばかり}

の本歌があつて、『宝物集』に、

此歌、世継并に宇治大納言隆国の物語には、小野宮殿実頼陣の座に
おはしけるに、南殿の花面白く散けるを見給ひて、「只今土御門中納言
のまいられよかし」とたはぶれ給ひけるを、敦忠公参り給へりければ、
いまだ居も定め給はぬに、「あの花はみ給ふか、をそし」との給ひけれ
ば、かく読給へり。拾遺・金葉両集には、「源公忠」とあり。又公忠が
集あり。⁽²⁾

もっとも『世継』といえは『栄花物語』『大鏡』にあたるが、いずれにも

この説話はない。『拾遺集』、『金葉集』にありというが、『金葉集』には見えない。

『宇治大納言隆国の物語』というのをかりに『今昔物語集』とすれば、その巻第廿四「敦忠ノ中納言、南殿ノ桜ヲ讀和歌語第卅二」には次のようにある。

小野宮左大臣実頼が左大臣だった時、三月中旬参内したところ、南殿の太木の桜が見事に咲いて、「庭ニ隙无ク散リ積テ、風ニ吹キ被立ツ、水ノ浪ナドノ様ニ見ヘタルヲ」すばらしい、こんな見事に咲いているのは例年にない、土御門中納言敦忠が来ないものかな、見せたいものじやといっているところへ、当の敦忠がやって来た。

大臣、「極ク興有ル事カナ」ト喜ビ給フ程ニ、中納言参テ、座ニ居ルヤ遅キト、大臣、「此ノ花ノ庭ニ散タル様ハ、何ガ見給フ」ト有ケレバ、中納言、「現ニ懽フ候フ」ト申し給フニ、大臣、「然テハ遅クコソ侍レ」ト有ケレバ、中納言、心ニ思給ヒケル様、「此ノ大臣ハ只今ノ和歌ニ極タル人ニ御座ス。其レハ墓々シクモ无カラム事ヲ、面无ク打出デタラムハ、有ラムヨリハ極ク弊カルベシ。然リトテ、止事无キ人ノ、此ク責メ給フ事ヲ、冷クテ止ムモ便无カルベシ」ト思テ、袖ヲ搔蹴ヒテ、此ナム申シ上ケル、

トノモリノトモノミヤツコ心アラバ、コノ春バカリアサギヨメスナ

ト。大臣、此レヲ聞給テ、極ク讃メ給テ、「此ノ、返シ、更ニ否不為ジ。劣タラムニ、長キ名ナルベシ。然リトテ、増サラム事ハ可有キ事ニモ非ズ」トテ、「只旧歌ヲ思ヘ益サム」ト思給ヒテ、忠房ガ唐ヘ行クトテ讀タリケル歌ヲナム語リ給ケル。

もつとも『拾遺集』雑春に源公忠の詠とする。

さて、一首の意味は、主殿寮の掃除をする者たちよ、若し風流の心をすこしでも解するならば、落花のきれいに散り敷くこの春のあいだは、朝の掃除はしないでおくれ、というのである。

実頼は、古歌を引用する。「なよたけのよながきうへに初霜のおきゐて物を思ふ頃かな」(古今、十八)である。

『今物語』は、説話からもこの二首の歌からも歌語をとっている。

すなわち、「トノモリ」が「春のとのもり」であり、「アサギヨメスナ」が「はかまうし」であり、「花に物思ふ」が、「初霜のおきゐて物を思ふ頃かな」にあたる。

従儀師の歌は本歌を踏まえて、なかなか凝ったものである。「ついひざまづきて」も、「袖ヲ搔䟽ヒテ、此ナム申シ上ケル」にあたる。

ともあれ、『今物語』は右の故事を念頭においている。「いままでいかにさうぢをばせざりけるぞ。ふしぎなり」も、「をそし」に該当する。はやく歌を詠め、にも相当する。そこで、即座に詠んだのがこの歌だった。

それをこともあろうに、「このたわけものめが！」という口ぎたない言葉を吐いた不風流を通りこした執行に、今はこうなっている、なんということだ、と笑っているのが、作者なのだ。ここで執行もさもありなんと、歌をよむというのなら名をのこしたであろうに。あるいは実資のようにやたらな歌は出来かねると、ふさわしい故事でもあげるなりすれば、見事だったのだろうが。

そこで次に問題なのは「はゝかつひ」である。これも深い意味も忘れて、あるいは深い意味があるとは知らないで、ただ、「このたわけものめが！」と口汚くののしったというわけかも知れない。

ダメ押しのかたちで、作者がつけ加えたのは、ここまでいうとは、無風流もきわまった、というところであろうから、笑いの落ちとしての罵詈であり、これは下品ではあるが、内輪では、そう罪のない悪態だったのだろう。

三

校注本文では「はゝかつひ」となっている。古いところで「有朋堂文庫本」では、『宇治拾遺物語』と合冊になっている

が、その頭注では、

はゝかつひ——不詳

とする。校注本の頭注には、

親をはずかしめる罵言の一種であろう。とし、その補注（二〇一）では、「無風流、無教養な人物が、風流を解する者に向ってあるまじき言を吐いて恥の上塗りをした話であると思われる。」とするのはその通りである。そして、

「はゝかつひといひて猶しかりけり」は、従儀師の歌も解釈できずに口答えるなど叱ったものか、あるいは「はゝかつひ」という語そのものがきわめて口汚い罵言なのであろう。（中略）「はゝかつひ」に何らかの誤写があつて、憚り居れ、口答えるな、の意の語と考えることもできるかも知れない。しかし、「はゝがつび」と解釈して、相手の母を恥かしめる形の、罵りの語とみる方がよい。

とある。

「はゝがつび」がよい。

母開

すでに増淵典子氏がこんなふうに記したのは、示唆に富んでいる。

「掃く」とは、箒で掃く意から、男が女と不特定多数の関係を持つことをも意味したらしい（『広辞苑』参照）。「こや御房がはき侍らぬに」という従儀師の口答えにに応じて、執行が「それはお前の母のつび（屎）だ」の意をこめて「はがつび」という変な文句で、一喝したのである。（51）の歌に見える「庭も掃かまうし」は、一面に散り敷いた梅の落花を取除くのが惜しいという気持ちと、掃除が大儀でいやだという心持ちを兼ね合わせている。（なお、「庭も掃く」からおそらく女性と交渉をもつの意が生じてくるかと思う。）僧侶の抑圧された感情のハケ口がこんなところに

も出ていることがわかる……。(4)

増淵氏の解の妥当なのは、「は、かつひ」を「母が屎」と解したところである。「母が開」からさかのぼってこの歌を解釈すると意味深長なものとなり、花の散るのも惜しい、というのにも裏の意味があって、掃くのも惜しいし、多勢の女を相手にするのも面倒だし、ということになる。現在でも「女は掃くほどいる」などというが、これは元来遊里語であって、『今物語』当時そのように使われていたかどうか。女を散らすのも惜しいが、片づけるのも面倒で、そういうことは御自分でなさいましよ、とやったら、たしかに「この莫迦め」と腹を立てるだろうが、そこまで深読みすると、この説話は風流を解するものと、解さないものとの対照ではなくなってしまう。

これらは要するに、「は、かつひ」がよく解らなかつた時代の考察だから、推理が正鵠を射ていないことも止むを得ないことで、むしろ果敢な挑戦に敬意を表すべきであろう。

前後の関係から、一話の主眼はわかるが、いまひとつ、核心のところが分からないために、この話が腑に落ちない。このもどかしさを一挙に解決してくれるのが、笠松宏至氏の「お前の母さん……」という、中世の「悪口罪」についての論文である。⁽⁵⁾『今物語』のこの部分には直接触れてはおられないが、あわせ考えるとまさに目の鱗が落ちる、という思いである。以下はほとんど氏の論文の要約である。

建長元年（一二四九）七月、幕府が下した判決のなかの悪口について、この相論は駿河国宇都谷郷今宿の傀儡^{くぐつ}が、同郷領主久遠寿量院の雑掌を相手どつたもので、傀儡栄耀尼に縁のある男がさしたる罪もないのに、寺家から過料をとられた。雑掌の陳弁は、その男が「母開に及びて放口」し、調査したところ事実を認めたので過料を課したというのである。幕府はたいした重料でもないのに、過料をとつたのは行きすぎであるとして今後は禁止するよう判決が出たと。

建長三年（一二五一）十月、厳島神社の楽頭佐伯道清が、職権を舞師左近将監久成に侵害されたための訴訟である。道

清がいうには、「時々尅々に悪口を吐き、母、開に懸りて放言」したのは許せないとして、久成の悪口を嚴重に取締ってほしいと。

『中世法制史料集別巻、御成敗式目註釈書集要』所収の「池辺本成敗式目注」には、「悪口ノ咎ノ事」があり、悪口の咎は不孝の罪過に準えて重罪であるとしているという。そして悪口がよいくないのは、一方で「親まき」といえば、人もまたそういう返すことになる。だから「悪口」は返って自分の親を罵る結果になるのだと。

そしてやはり笠松氏があげている『古今著聞集』のふたつの例であるが、そのひとつは高倉茂通が栄性法眼の宅へ行き、「栄性法眼め、おやまけく」と大声で呼びながら縁にあがって行った。栄性も「茂通めも、おやまけく」といい返し、しばらく雑談して酒宴となったというのがある。

『古今著聞集下』⁽⁶⁾の頭注では、「栄性法眼め、おやまけ、おやまけ」について、『親枕く』で母親と通じた意を語源とする罵り言葉か。とすれば不徳義漢、極道者、助平野郎の類語。」とする。

もうひとつのは、築地をなおしている職人たちが、当時有名な説経師聖覚の噂をしていた。そこへ聖覚の乗る輿が通らなかった。聖覚の力者法師がききとがめて、「おやまけの聖覚や、ははまきの聖覚や」と職人たちをののしった。職人たちをののしったはずが、聞いていた聖覚とすれば自分がいわれているような気がした、と人に語って笑った、という話をのせている。笠松氏は、なぜ「おやまき」、「ははまき」の下に「聖覚」の二字をつけたのかわからない。そして、なにか当時の罵言にそのようなものがあり、それがたまたま主人の名と語呂合わせになったか、とする。ずっと笠松氏の記述を引かせてもらいながら、揚足をとるようで申訳けないが、「おやまきの。聖覚や」、「ははまきの。聖覚や」と句切って読めばよい。「このろくでなしめが。おらが御主人様を軽く、聖覚々々というもんじゃねエ」といったところであろう。説経の名人だったから、人気スターの評判をあれやこれやと職人たちがしゃべっていたのだろう。

さて、「おやまき」、「ははまき」は、わが国古代の「くにつつみ」の一つである「己が母犯せる罪」に源を発し、『母開』『おやまき』が、かつては氏族や部族全体に穢れをもたらす厭うべき『つみ』の名であり、軽々しく口にするのできなかったタブーの系譜をひくものと考えてよいのではないか。」と笠松氏はしている。笠松氏はまた魯迅の隨筆をも要約されているが、私はその冒頭を引用する。

誰にせよ、中国で暮しさえすれば、「他媽的」(最ひどい罵語で「奴の母のものを犯してやるぞ……」という意)またそれに類したきまり文句を、いやでも聞かねばならぬ。この言葉の分布は、多分、中国人の足跡の至るところに行きわたっているだろうと思う。使用の頻度も、おそらく鄭重な「您好呀」(御機嫌よう)より少いとは限るまい。あ

る人の言うように、牡丹が中国の「国花」であるとすれば、これは中国の「国罵」といえるだろう。⁽⁷⁾魯迅がいおうとするところは、成り上らぬ者はこれを口にするが、成り上ったものは上等人となって上品温雅になる。そうしたものに対して反抗的に「他媽的」をつかう。中国は本当に平等になるように改造しない限り、永遠に無声、有聲のこの「国罵」はなくならないだろうという憂国の至情の吐露となる。この言葉を発明した人は卑劣な天才かも知れないが、この「国罵」をあびせられる支配階級こそ、なおのこと卑劣だと。

ただこの言葉はもっとも親愛の意味でも使われることを述べているとこで、私などはホッとす。

だが、たまには例外的用法もある。その場合は驚きをあらわしたり、感嘆をあらわす。私の郷里で、農夫父子が一緒にひる飯を食べているところを見たが、息子がおかずを指さして父親に向い、「こいつはうめえ、媽的おめえ食べてしろよ!」という、父親は「おらあ食いたくねえ。媽的おめえ食いな!」と答えた。ここでは、もうすっかり醇化されて、今日流行の「わが親愛なる」という意味になってしまっているわけである。

父子が「媽的」のやりとりするところは、ちょうど高倉茂通と栄性法眼のやりとりと同じだ。「栄性法眼め、おやまけ、く」に対し、「茂通めも、おやまけく」といい、雑談になり、酒宴になったのに似ている。それでも「知音もかかる事やは侍るべき。人の利口にてありけるやらん。」ともいっている。やはり相当きつい戯言だったにはちがいない。

「女っ誑しの栄性坊主、いるか」「なんだ。茂通の馬鹿か。まああがれ」といったところだ。これは『古今著聞集』の「興言利口」のところで、つづいて栄性は、一間を隔てて尼と一緒に住んでいて、

この事のしたくなりける時は、ひる中にも、前をかきあげて、「一尺すはむの小仏、頭をふりて参りたり」といひて、尼がもとへあゆみ行けば、この尼、取りもあへず、また前をはだけて、「三間四面の小御堂、御戸ひらきて参り候」とこたへて、中の間へ行き合ひてはじめけりとなん。比興の事なりかし。

というおまけまでついている。但し、この段抄入である。念のため。

四

さて『今物語』にもどる。無風流な執行は風流の従儀師を、もちろん従儀師が風流だなどと思わなかった。「わしに掃けどと?。この莫迦、かば、ちんどんや。お前の母さんでべそ」といったことになる。「母開」はきつい言葉だが、言葉は場合によってちがってくる。こののしられて従儀師は不快ではあったろうが、そうかといって訴訟に及ぶほど根にもったわけではあるまい。

悪口は、時と場合によって大問題に発展することは、その状況による。「バカヤロー」一言で議会在解散になったともあるが、親子のあいだでその程度のことはある。

だが、散る花を惜しむ従儀師と、コチコチになって清掃して御幸を御むかえしようとしている、上の権力に弱く下の者

に威張る執行との対比はおもしろい。『今物語』も連想の系で編まれていて、つぎの四十六話もこの類話である。住吉神社へ貴紳の参拝を前に、神主の命で清掃に励んだ使用人たちが、張り切りすぎて柱、長押、妻戸などに書きつけてあった由緒ある歌をみな削り捨ててしまったので、神主はなげいた。そこへ参った老尼が、

世の中のうつりにければ住吉のむかしの跡もとまらざりけり

と詠んだ。作者は、「これは承久の乱のち、世の中あらたまりける時のこと也」としている。⁽⁸⁾

『今物語』はその題のように「今」を書いた物語である。第四十五話の場合、「今」といっても、鳥羽院の頃であるから、当時としても、すでに数十年は経ていたわけであるから、この説話そのものを、「今」とするのはあたるまい。「今は昔……」といたいところだが、第四十六話と類話になるように、現在にも立派に通用する「をこ」話なのである。

悪口が成敗式目のように一面嚴重に扱われるようになったのは、成敗式目の時代であれば、この説話はそれより遙か以前のこととなるが、信実が、『今物語』を書いた頃はおよそこの時代に相当するだろう。が、このように悪口が問題になるのは状況次第であって、身近かの場合には、おそらく起こらなかったであろう。他人行儀のところ、もしくは公式の場合には、悪口雑言は許されない。しかし、親しい間柄では、口汚いことをいってもそれが親愛の情を示すものとなる。

この説話が親愛の情をあらわすものというのはいかがでしょうか、心許しあった間柄ではあったのであろう。

「たわけ」も、元来は同様で、「親たわけ」、「母たわけ」の罪で、タブーであった。それが、何となくただの罵言として使われるようになった。

「母開」も、とっさの腹立ちで放言されるようになった。しかも、法勝寺執行という相当な地位にあるものからである。風流が風流でなくなった。タブーがタブーでなくなった。その結果は、笑いである。一瞬の笑いである。よく生を捉えている。

『今物語』は、そういう昔とちがってしまった「今」をとらえている。否定しようが肯定しようが、生きているのは「今」でしかない。フィルムの一齣のように生をとらえ、確認しているのが『今物語』である。「仕様がねえなあ」、諦観にも似た作者の人間愛である。

* *

笠松氏の論考にほとんど寄りながら書いて来たので、いささか気がひける。

そこで、ひとつ、使われる場所によって悪罵が親愛の意味をもってくる例を加えておこう。山田詠美氏作品からで、英語。

黒人脱走兵スプーンが、逮捕され、連行される直前の女主人公との会話である。

『ベッドタイムアイズ』⁽⁹⁾のその別れの場面は、高雅と猥褻さが渾然一体となって詩的ですからある。

〔注〕

- (1) 久保田淳・大島貴子・藤原澄子・松尾葦江校注『今物語・隆房集・東斎隨筆』三弥井書店、昭和五四年五月刊。
- (2) 小泉弘・山田昭全他校注『宝物集 閑居友 比良山古人霊託』(新日本古典文学大系 岩波書店、一九九三年一月刊)。
- (3) 山田孝雄他校注『今昔物語集 四』(日本古典文学大系、岩波書店、昭和三十七年三月刊)。
- (4) 増淵典子「現代語訳『今物語』」(5) (並木の里) 第十一号、昭和五〇年十一月。
- (5) 笠松宏至「お前の母さん……」(網野善彦・石井進・笠松宏至・勝俣鎮夫『中世の罪と罰』(東京大学出版会、一九八三年二月刊)。
- (6) 西尾光一・小林保治校注『古今著聞集下』(新潮日本古典集成)「五七六」「高倉宰相茂通と栄性法眼と交遊・放逸の事(抄入)」、五四三「聖覚法印の力者法師、築地の崩れを築く者どもの話を聞きとがめ罵りたる事」。
- (7) 「他媽的!」^{タイムマシーン}について」松枝茂夫訳『魯迅選集』第十五卷(岩波書店、一九五七年五月刊)。

(8) 注(1)校注〔四六 住の江殿〕。

(9) 河出書房新社、昭和六十年十一月刊。

なお『アメリカ俗語辞典』(The Under-Ground Dictionary)「原編著 ユージン E・ランデイ 訳編者 堀内克明、昭和五〇年九月研究社刊。一五九頁および二七五頁に訳語として笠松氏論文の見出しとなった用例が出ている。訳語といっても、日本での現代のそれに相当する語の意である。ひるがえってみれば、このようなところからも『今物語』の当代性が垣間見られようと思う。昭和五三年一月の第八版によった。